

研究計画概要

助成年度・種別	2021 年度 若手研究助成
研究者	鈴木 拓朗
所 属	東京大学大学院
研究テーマ	ストーキング事案に対する判断に与える要因の検討 —加害者と被害者の関係性への着目—
研究計画概要	<p>ストーキング事案において、被害者と加害者が親密関係である事案は、非親密関係である場合よりも暴力のリスクが高いことが報告されている。しかし、第三者からは親密関係者間の事例のほうが、被害がより軽微であると判断されやすい傾向がある。このような事実と異なる認識は、一種の認知バイアスであると考えられる。</p> <p>このような認知バイアスが存在する場合、親密関係の事案の深刻度が過小評価され、十分な支援や介入につながらない恐れがある。しかし、この認知バイアスが日本人の集団においても見られるものであるのかは確認されていない。</p> <p>そこで、本研究では仮想シナリオを用いた質問紙実験を実施し、ストーキング事案の深刻度の判断に与える、加害者と被害者の関係性の影響を検討することとした。また、ストーキング事案に対する判断には、加害者、被害者、評価者の性別も関連していることが指摘されているため、本研究ではこれらの影響も踏まえて検討を行う。</p> <p>本研究によって認知バイアスの存在が確認されれば、この点を警察や行政の専門職員への教育や、一般市民へのストーキング防止教育などに盛り込むことで、適切な対応や援助要請行動を促進させることが期待される。</p>
選考委員からのコメント	<p>親密関係間のストーキング事案を軽微なものと判断してしまう認知バイアスに焦点をあてたこの研究は、事案が深刻になる前の相談や援助要請を促進する前提条件を明らかにするという意義があり、重要な研究課題である。また、加害者－被害者の性別の組み合わせに対する目配りも大事な論点である。研究成果をストーキング対策に活用できるよう、研究知見の社会への還元が期待される。</p>